

# NACSIS Webcat と Webcat PLUS

田 坂 憲 二

## 1

筆者は、前稿<sup>(#1)</sup>で、国立情報学研究所(NII)の総合目録データベースWWW検索サービスである、NACSIS Webcat を使用することによって、全国の大学や研究機関の図書館の蔵書の、かなりの部分の横断検索が可能になったことについてふれ、その利便性の大きさと、派生する多少の問題点について、川端康成の個人全集を材料に用いながら論述した。旧稿における NACSIS Webcat のデータは、原稿投稿時点の、2002年9月現在のものを使用した。その翌月、2002年10月8日から、情報学研究所は、Webcat Plus という新しいシステムによるサービスを並行して提供するようになった。

新システムと旧システムの相違は何か、改善された点は何か、逆に不便になった点はないか、サービスが提供され始めたばかりの日の浅いシステムだけに、検討してみる意味は大きいだろう。

猶、今回の Webcat および Webcat Plus のデータは、2003年9月3日現在のものである。

## 2

Webcat Plus とは、どのようなシステムであるのか。従来の、Webcat とはどう違うのか、情報学研究所のサイトの当該ページ<sup>(#2)</sup>から見てみよう。

同ページの、「概要」の部分には、次のように記されている。

Webcat Plus は、国立情報学研究所 (NII) が構築を進めている NII 学術コンテンツ・ポータル「GeNii (ジーニイ)」を構成するコンテンツのひとつです。大量の情報の中から、人間の思考方法に近い検索技術「連想検索

機能」を使って、必要な図書を効率的に探すことができるシステムが、この Webcat Plus です。

現在、Webcat Plus のホームのページでは、特に変更をしないかぎり、最初に連想検索のキー・ワードを入力する形になっている。単純な一致検索を行おうとすると、「一致検索」の部分をクリックして、次の画面に進まねばならない。このことから、上の「概要」の記述からも分かるように、Webcat Plus の現時点での最大の利点は、連想検索という新しい検索方法にある。キー・ワードを上手に設定すれば、かなり有効な検索手段となりうるであろう。ただ、キー・ワードの設定によっては、膨大な数になってしまう。たとえば、連想検索に「小津安二郎」と入力すると14385件もの書籍や映像資料がヒットしてしまい、この中には、小津文献のみならず、小津次郎から大田晶二郎、青山二郎などさまざまなものが含まれている。これらの中から探し出すよりは、自分でいくつかのキー・ワードを設定し、部分一致検索などで探した方が早いかもしれない。後述する目次情報をもし網羅できたとすれば、目次の文字列を総合的に検索するキー・ワード検索のようなものを、連想検索と、フリー・ワード検索（これは Webcat の機能）の中間的なものとして設定でき、そうすれば、利用者が自分の手許の情報に応じて使い分けができるのではないか。

その意味で、Webcat Plus の機能の中で、筆者が個人的に注目しているのは、トーハン、日版、日外アソシエーツ、紀伊国屋書店の4社が構築したデータベースである「[BOOK] データベース」の情報を取り込むことにより、1986年以降に刊行された書籍については、目次・帯・カバーの内容情報を見ることが出来る点である<sup>(註3)</sup>。目次情報が一部であること、装幀・造本の記述がほしいことなど、さらに改善を望みたい部分はあるが、現時点では、オンライン上で書籍の概略を知ろうとすれば、貴重な情報源である<sup>(註4)</sup>。

それ以外の点では、日本語の図書に限定されている点が、Webcat との相違点である。これは、Webcat の機能に比べればやや後退している部分であり、あるいは、この点が改善されれば、Webcat Plus に統一する予定であるのかもしれない。「Webcat Plus サービスの位置づけ」の部分では、次のように記されている。

国立情報学研究所では、目録所在情報データベースを基にして、図書・雑誌の書誌・所在図書館情報を検索できる Webcat サービスを1998年から行っており、国内外から非常に多くの方々にご利用いただいています。

Webcat Plus は、検索機能・性能を大幅に強化し、使い勝手を向上させて

おり、「次世代 Webcat」となることを目指して開発しました。

Webcat が日本語以外の図書や雑誌の情報をも収録しているのに対し、Webcat Plus は今のところ日本語の図書のみであることから、当面は両者を並行してサービスします。

Webcat Plus の内容や機能が充実した時点で、サービスを一本化することを検討しています。

ただ、連想検索や「[BOOK] データベース」の情報を除いた、単純な一致検索でも、Webcat Plus は Webcat に比べて、機能が後退している部分もあるのではないかと思われる。今後改善される可能性はあろうが、取りあえずはそのような部分について考えてみる必要があるだろう。

### 3

旧稿で問題にした、角川版『昭和文学全集』で、ページ数の誤認から、Webcat では第18巻「宮沢賢治集」のデータが二重になっている問題は怎么样了であろうか<sup>(註5)</sup>。

Webcat Plus の一致検索で「角川版昭和文学全集」の名前で入力すると、「タイトル 角川版昭和文学全集」「出版事項 東京：角川書店」「形態事項 冊；20 cm」と出てくるだけで、これ以上の詳細情報のページには入れない。従って、「宮沢賢治集」のデータの検証はできないのである。

Webcat の時は、簡略表示で「角川版昭和文学全集」と叢書名が出て、そこをクリックすると詳細情報のページに移動し、第7巻「芥川龍之介集」から第4巻「吉川英治集」まで、所収作家の五十音順に叢書の細目が一覧表示される。さらにその細目の一つ、たとえば「芥川龍之介集」をクリックすると、角川版『昭和文学全集』の「芥川龍之介集」の詳細な書誌情報が得られ、かつこの本を所蔵している図書館名などが、慶應義塾大学日吉メディア・センターを筆頭に全16箇所が表示されるのである。

全集や叢書の場合、各巻の内容や細目が一覧できないと、情報としてはほとんど役に立たない。この部分は、書誌情報の最も基礎的な部分といって良いのではないか。単行本の帯や目次と同様に、全集の各巻の内容も表示できることが肝要である。また全集・叢書の場合、購入時に、あるいは所蔵している間に、どうしても欠巻がでる可能性があるが、個別の巻冊の所蔵データであれば、蔵書の実体とデータの一致率は極めて高い。

Webcat では、ある全集・叢書のデータは、巻別の所蔵データが中心であっ

たり、別の全集・叢書では総体の所蔵データが中心であったりと、やや統一性に欠ける恨みはあるが、これは使用する側が呑み込んでおけば解決できる問題である。少々データ上の誤記があっても、利用者が詳細なデータを入手できることが、何よりも重要である。むしろやや不統一であっても、出来るだけ生のデータの形に近いものを、多くの利用者の目に触れさせることによって、可能な範囲での統一性を希求し、また登録上・入力上の誤謬も訂正し、最終的に完璧な書誌情報を作り上げることにつながるのではないかと思われる。Webcatの形であれば、「宮沢賢治集」のページ数の誤謬も、データが二重になっている問題も、いずれ利用者の目に触れ、修正されることになろう。

角川版『昭和文学全集』に限らず、Webcat Plusでは、全集・叢書の詳細情報は入手できない。新潮社の『日本文学全集』は、同じ名前の同じ判型の全集でも、全72冊、全50冊、全40冊、全45冊と構成がまったく違うものが4種類もあるから<sup>(註6)</sup>、詳細情報にすぐに飛べる形にしておかないと、書誌情報としてはほとんど役に立たないのである。

「次世代 Webcat」として「サービスを一本化」する予定であれば、全集・叢書の詳細な内容が一覧できる機能の付加、もしくは復活が早急に望まれる。

## 4

前節で述べたような大まかな問題点はあるが、具体的に川端康成全集の例で更に詳しく検討してみよう。

まず、Webcat Plusの一致検索で、「川端康成全集」と入力すると、次のように7件が出てくる。部分一致で検索すると『川端康成全集装画帖』も含まれて出てくるが、これを除くと、Webcatの時と件数は変わらない。川端没後に刊行された最大規模の全37冊の全集が、第30巻までと、第31巻以降と、1999年に復刊されたものと、3件(1～3)に分かれて出てくるのも同じである。1969年の全集は、Webcatでは冊数が表示されていなかったが、Webcat Plusでは19冊と明示されるようになっている。最も際だった変化は、これらの全集を所蔵している図書館の数がこの段階で表示されていることである。たとえば、7の1948年版の全16冊の全集は、35の機関が所蔵しているということが一見して分かるようになっている。Webcatは、簡略表示から詳細表示に進んだ段階で所蔵機関数が出てきたから、多少便利になったといえよう。前節で述べた、角川版『昭和文学全集』や、新潮社の各種の『日本文学全集』では、所蔵機関が示されていなかったが、一種の工事中と認識して良いのかもしれない。

1. 川端康成全集 (30) 川端康成著；：set - 補巻2. -- 復刊. -- 新潮社, 1999, 37冊.
2. 川端康成全集 (147) 川端康成著；川端康成記念會編；第31巻 - 補巻2. -- 新潮社, 1980, 37冊.
3. 川端康成全集 (145) 川端康成著；川端康成記念會編；第1巻 - 第30巻. -- 新潮社, 1980, 37冊.
4. 川端康成全集装画帖 (1) 安田靫彦著 -- 中央公論美術出版, 1976, 1冊.
5. 川端康成全集 (7) 川端康成著 -- 新潮社, 1969, 19冊.
6. 川端康成全集 (40) 川端康成著；第1巻 - 第14巻. -- 新潮社, 1959, 冊.
7. 川端康成全集 (35) 川端康成著；第1巻 - 第16巻. -- 新潮社, 1948, 冊.

そのように考えると、このまま改良が進めば、Webcat Plus に一本化されても良いようであるが、実は現段階で大きな問題が生じているのである。

たとえば、5の1969年から刊行された全19冊の『川端康成全集』の所蔵機関が7と表示されているのは、いくら何でも少なすぎるのではないか。川端個人の人気から考えてもあり得ない数字である。更に、川端は、1968年にノーベル文学賞を受賞しており、その熱気さめやらぬ翌年から刊行が始まった全集でもある<sup>(註7)</sup>。この数字は誤謬の可能性が極めて強い。具体的に検討してみる必要がある。

Webcat Plus で、69年版の全集を所蔵している機関を掲出すると、茨城大学、金沢大学、熊本大学、東京大学、福岡女子大学、法政大学、龍谷大学の7校である。しかも、東京大学駒場図書館のデータは「[[月報]918.68：Ka91：g[WS]]」のみである。月報のみ所蔵ということはあまりあり得ないから、これは何らかの形でデータが分離したと考えるべきであろう。

そこで、Webcat の方で、同じく69年版の全集を検索してみると、全集共通の書誌情報として「川端康成全集 / 川端康成著<カワバタ ヤスナリ ゼンシュウ>. -- (BN01605840) 東京：新潮社, 1969-1974 19冊；20cm」などが記された後、「浅草紅團 / 川端康成著. -- 新潮社, 1970. -- (川端康成全集 / 川端康成著；第2巻)」、「伊豆の踊子 / 川端康成著. -- 新潮社, 1969. -- (川端康成全集 / 川端康成著；第1巻)」、「禽獸 / 川端康成著. -- 新潮社, 1969. -- (川端康成全集 / 川端康成著；第3巻)」、「古都；片腕；落花流水 / 川端康成著. -- 新潮社, 1970. -- (川端康成全集 / 川端康成著；第12巻)」などと各巻別

のデータが列挙される。それぞれの巻をクリックすると、巻別に所蔵機関が表示されるのは、前節で述べたとおりである。

たとえば、第2巻「浅草紅團」を所蔵している機関として、ICU、OXFORDを先頭に118の大学・短大の名前が列挙される。東京大学でも、総合図書館と駒場図書館の2箇所所蔵されている。以下、第1巻が121、第3巻123、第12巻122と、多少数字にばらつきはあるが、概ね120前後の機関でこの全集を所蔵していることが分かる。

重要なのは、Webcat では、このような各巻別のデータの末尾に、所蔵図書館として茨城大学以下の7つの機関の名前が列挙されていることである。この7機関が、上述した Webcat Plus のそれと完全に一致するのである。恐らく、Webcat の方では、何らかの事情で、巻別の個別の所蔵情報からはじき出されたものが、末尾に付加される形となったものと思われる。Webcat Plus は、その付加情報のみを継承して、巻別の所蔵情報は表示されないから、全国の（一部国外も含まれるが）120前後の大学がこの全集を所蔵しているというデータが消えてしまったのである。

個別の本の書誌情報は、国立国会図書館のNDL-OPACや、各大学の個別のOPACでも代用できる部分がある。それらに比べて Webcat や Webcat Plus の情報のすぐれている点は、大量の所蔵機関の蔵書情報<sup>(#8)</sup>を横断検索できるという点にある。従って、全国の機関の所蔵情報というのは、是非継承して貰いたい部分である。

## 5

次に、4種類の『川端康成全集』の中でも、特に問題となった、1959年に刊行の開始されたA5判の全集（以下、59年版全集と適宜略記することがある）について、細かく分析してみよう。

まず、59年版全集が、全国の大学や研究機関にどれくらい所蔵されているかを、Webcat と Webcat Plus のデータを比較することから行ってみよう。両データとも、所蔵機関はフェリス女学院大学を先頭に、和歌山大学まで、40機関の名前が挙げられており、所蔵機関そのものは完全に一致する。59年版の全集は、Webcat の段階から、所蔵情報が各巻別に分かれていなかったもので、前節で見た、69年版の全集のような問題は生じない。

一見、Webcat から Webcat Plus へのデータの移行は、なんの問題も惹起していないように思われる。

ところが個別の機関が所蔵している59年版全集の具体的冊数を見てみると、

両データで必ずしも一致しない部分があるのである。基本的には、個々の所蔵機関の所蔵データを吸い上げる形で出来ているはずだから、Webcat と Webcat Plus の二つのデータに相違はないはずであるが、なぜそのようなことが起きるのであろうか。ともあれ、両データの蔵書状況を一覧できるようにしてみよう。

大学・短期大学図書館の配列は、Webcat と Webcat Plus の配列に従って並べてある。略称や音訓などによって、必ずしも五十音順ではない部分もある。矢印の前が Webcat のデータにおける各図書館の59年版全集の冊数、矢印の後が Webcat Plus のデータ上の冊数である。Dは各図書館の請求記号などの書誌データが附載されているもの、Xはそのような書誌データがなく巻数のみが生かされているものである。

フェリス女学院大学	9 D → 9 D
岩手大学	12D → 12D + 2 X
岐阜女子大学	2 D → 2 X
京都橘女子大学	12D → 12X
宮城教育大学	9 D → 14X
京都大学	10D → 10D
金沢星稜大学	12 d <sup>(註9)</sup> → 14X
九州大学六本松分館	12D → 12D
広島女子大学	8 D → 8 D + 6 X
広島大学中央図書館	7 D → 7 D + 7 X
香川大学	12 d <sup>(註10)</sup> → 12X
大阪市立大学	1 D → 1 D + 13X
山梨県立女子短大	12D → 12D + 2 X
四国学院大学	12 d <sup>(註11)</sup> → 12D + 2 X
実践女子大学	12D → 12D + 2 X
昭和女子大学	2 D → 14X
大阪樟蔭女子大学	12D → 12D
上智大学	12D → 12D
信州大学	6 D → 6 D + 8 X
神戸大学国際教養	10D → 10D + 4 X
神戸大学人間科学	12D → 12D
静岡県立大学	12D → 12D
跡見学園女子大学	12D → 12D

千葉大学	12D	→	12D
相愛大学	12D	→	14X
鶴見大学	12D	→	12D
帝京大学	12D	→	12D + 2 X
帝塚山学院大学泉ヶ丘	12D	→	14X
東京大学総合図書館	12D	→	12D
東北大学本館	12D	→	14X
藤女子大学本館	12D	→	12D + 2 X
日本大学文理学部	10D	→	10D + 4 X
梅花女子大学	12D	→	12D
武蔵大学	10D	→	10D + 4 X
北海道教育大学函館分館	14D	→	14D <sup>(註12)</sup>
明治大学和泉図書館	1 D	→	1 D + 13X
立教大学	12D	→	12X
琉球大学	12D	→	12D
龍谷大学大宮図書館	12D	→	14X
和歌山大学	11D	→	11D + 3 X

この一覧によれば、59年版の『川端康成全集』の所蔵冊数が、Webcat と Webcat Plus の二つのデータで完全に一致している機関は、フェリス女学院大学 (9)、岐阜女子大学 (2)、京都橘女子大学 (12)、京都大学 (10)、九州大学六本松分館 (12)、香川大学 (12)、大阪樟蔭女子大学 (12)、上智大学 (12)、神戸大学人間科学系図書室 (12)、静岡県立大学 (12)、跡見学園女子大学 (12)、千葉大学 (12)、鶴見大学 (12)、東京大学総合図書館 (12)、梅花女子大学 (12)<sup>(註13)</sup>、立教大学 (12)、琉球大学 (12)、以上17大学しかない。カッコの中は、各機関が所蔵している冊数である。これに対して、岩手大学、宮城教育大学以下、和歌山大学まで22の大学では、Webcat と Webcat Plus の二つのデータで、所蔵冊数が異なるのである。もともとデータ上問題のある北海道教育大学函館分館を除くと、全39機関のうち60パーセント近い機関で、所蔵冊数のデータが異って出てくることになる。Webcat と Webcat Plus のデータのうち、どちらを信用したらよいのであろうか。また、このような問題はどのようにして生じたのであろうか。節を改めて論じてみたい。

比較的分かりやすいのは岩手大学の例である。岩手大学は、「12D → 12D + 2 X」という所蔵冊数の変化が見られた。

実は、岩手大学では Webcat のデータは、以下のように12冊分すべて請求記号や資料番号が付されていた。

第1巻 E918 : 58 : 1 0200800761 ; 第2巻 E918 : 58 : 2 0200800779 ; 第3巻 E918 : 58 : 3 0200800787 ; 第4巻 E918 : 58 : 4 0200800795 ; 第5巻 E918 : 58 : 5 0200800803 ; 第6巻 E918 : 58 : 6 0200800811 ; 第7巻 E918 : 58 : 7 0200800829 ; 第8巻 E918 : 58 : 8 0200800837 ; 第9巻 E918 : 58 : 9 0200800845 ; 第10巻 E918 : 58 : 10 0200800852 ; 第11巻 E918 : 58 : 11 0200800860 ; 第12巻 E918 : 58 : 12 0200800878

これが、Webcat Plus のデータになると、請求記号が付されている12冊分のデータと、巻数のみの13巻、14巻のデータとなる。

第1巻 E918 : 58 : 1 ; 第2巻 E918 : 58 : 2 ; 第3巻 E918 : 58 : 3 ; 第4巻 E918 : 58 : 4 ; 第5巻 E918 : 58 : 5 ; 第6巻 E918 : 58 : 6 ; 第7巻 E918 : 58 : 7 ; 第8巻 E918 : 58 : 8 ; 第9巻 E918 : 58 : 9 ; 第10巻 E918 : 58 : 10 ; 第11巻 E918 : 58 : 11 ; 第12巻 E918 : 58 : 12 ; 第13巻 ; 第14巻

この場合は、Webcat と Webcat Plus のデータの相違は分かりやすい。第13巻と14巻の情報が Webcat Plus の段階で付加されたものである。

すなわち、59年版の全集は全14冊（これが誤っていることは次節参照）であるとの認識から、現実に所蔵している12冊に、未所蔵の13、14巻の巻数のみ付記したものである。このような形であれば、誤ったデータの13巻、14巻を削除すればよいから、比較的処理もしやすい。

岩手大学のようなパターンで、極端な例は、本来は59年版の全集全12冊のうち第10巻のみの所蔵の大阪市立大学図書館と、第6巻と月報のみ所蔵している明治大学和泉分館が、ともに Webcat Plus では、全14冊というデータとなってしまう例である<sup>(註14)</sup>。

阪市大 図 第1巻 ; 第2巻 ; 第3巻 ; 第4巻 ; 第5巻 ; 第6巻 ;

第7巻 ; 第8巻 ; 第9巻 ; 第10巻 918.6//K1//1-10 ; 第11巻 ;  
第12巻 ; 第13巻 ; 第14巻

明大 和 第1巻 ; 第2巻 ; 第3巻 ; 第4巻 ; 第5巻 ; 第6巻  
918 || 115 |||| W ; 第7巻 ; 第8巻 ; 第9巻 ; 第10巻 ; 第11  
巻 ; 第12巻 ; 第13巻 ; 第14巻 ; 月報 918 || 115 |||| W

この二大学は、わずか一冊だけ所蔵しているにもかかわらず、14巻分のデータが出てくるのである。

これに対して分かりにくいのが、宮城教育大学、昭和女子大学、東北大学本館などの例である。これらの機関では、Webcat Plus では、すべて次のような形でデータが表示される。

第1巻 ; 第2巻 ; 第3巻 ; 第4巻 ; 第5巻 ; 第6巻 ; 第7巻 ;  
第8巻 ; 第9巻 ; 第10巻 ; 第11巻 ; 第12巻 ; 第13巻 ; 第14巻

これでは59年版の全集を第14巻まで所蔵しているという蔵書情報なのか、この全集そのものの書誌情報なのか不明である。一般的には、これらの機関には第14巻まで所蔵していると思われても仕方がないであろう。ところが、現実にこの3機関が所蔵している、59年版の全集の冊数は異なるのである。Webcat からこの3機関の蔵書情報を取り出すと次のようになる。

宮教大 ; 第1巻 890592104 ; 第2巻 890592112 ; 第3巻 890592129 ;  
第4巻 890592137 ; 第5巻 890592145 ; 第6巻 890592153 ; 第7  
巻 890592161 ; 第8巻 890592178 ; 第10巻 890592186

昭女大 凶 ; 第8巻 000054575 ; 第12巻 000054576

東北大 本館 ; 第1巻 01600424205 ; 第2巻 01600424213 ; 第3巻  
01600424221 ; 第4巻 01600424230 ; 第5巻 01600424248 ; 第6巻  
01600424256 ; 第7巻 01600424264 ; 第8巻 01600424272 ; 第9巻  
01600424281 ; 第10巻 01600424299 ; 第11巻 01600424304 ; 第12巻  
01600424312

宮城教育大学では1～8、10巻の9冊。昭和女子大学では8、12巻の2冊。東北大学では全12冊所蔵。このように、まったく異なる所蔵状況でありながら、Webcat Plus では、三大学が完全に同じデータとなっているのである。

岩手大学、大阪市立大学、明治大学などのグループと、宮城教育大学、昭和

女子大学、東北大学などのグループの、二つのグループのデータを比較することによって、Webcat から Webcat Plus へ移行する際の、異なった二つの傾向を看取することができる。

岩手大学の Webcat のデータでは、岩手大学附属図書館で使用されている請求記号と資料番号(書誌 ID、RGTN)が、ともに記されていた。これが Webcat Plus のデータになると、資料番号は削除されている。一方で、請求記号はデータとして残っているから、請求記号のついている巻は現実に所蔵されている巻、請求記号のついていない巻は所蔵していない巻、とはっきり区別することができる。このパターンの場合、Webcat Plus のデータを修正することが比較的容易であろう。利用者においても、現在の Webcat Plus のデータだけでも、それほど不自由ではない。

一方宮城教育大学、昭和女子大学、東北大学などのグループに共通するのは、Webcat のデータの段階で、各図書館自体の書誌データとしては資料番号のみであって、請求記号がなかったということである。Webcat Plus では、各図書館の固有の資料番号は、現在の画面では表示されないから、所蔵されている巻と所蔵していない巻の区別が付かない。このようなパターンの場合は、必ず Webcat のデータを参照しなければならない。早い段階での Webcat Plus のデータの修正が望まれる。

所蔵している図書館の請求記号と資料番号の有無が、Webcat Plus のデータに大きな影響を与えていることが確認できたが、更に残された問題もある。

神戸大学では、59年版の全集は、国際・教養図書室と、人間科学図書室の二箇所それぞれ所蔵されている。分室とはいえ、同じ大学の組織であるから、情報学研究所への提供データも統一されており、どちらも、Webcat では、請求記号も資料番号も併記される形である。

神大国際教養 ; 第1巻 918-6-K9//1 060020039978 ; 第2巻  
918-6-K9//2 060020043045 ; 第4巻 918-6-K9//4 060020040227 ;  
第5巻 918-6-K9//5 060020040481 ; 第6巻 918-6-K9//6  
060020040525 ; 第7巻 918-6-K9//7 060020040482 ; 第8巻  
918-6-K9//8 060020040098 ; 第9巻 918-6-K9//9 060020040321 ;  
第10巻 918-6-K9//10 060020043046 ; 第11巻 918-6-K9//11  
060020042991

神大人間科学 ; 第1巻 910-81-82//1 040000036551 ; 第2巻  
910-81-82//2 040000038753 ; 第3巻 910-81-82//3 040000037923 ;  
第4巻 910-81-82//4 040000037714 ; 第5巻 910-81-82//5

040000038082 ; 第6巻 910-81-82//6 040000040564 ; 第7巻  
910-81-82//7 040000038083 ; 第8巻 910-81-82//8 040000037715 ;  
第9巻 910-81-82//9 040000037716 ; 第10巻 910-81-82//10  
040000038823 ; 第11巻 910-81-82//11 040000043597 ; 第12巻  
910-81-82//12 040000041736

これが Webcat Plus では、資料番号が削除されるのは、これまでに見てきた  
大学と同じであるのだが、国際・教養図書室の方のみ、3巻、12巻、13巻、14  
巻という誤ったデータが付加されているのである。

神大国際教養 ; 第1巻 918-6-K9//1 ; 第2巻 918-6-K9//2 ; 第3  
巻 ; 第4巻 918-6-K9//4 ; 第5巻 918-6-K9//5 ; 第6巻  
918-6-K9//6 ; 第7巻 918-6-K9//7 ; 第8巻 918-6-K9//8 ; 第9  
巻 918-6-K9//9 ; 第10巻 918-6-K9//10 ; 第11巻 918-6-K9//11 ;  
第12巻 ; 第13巻 ; 第14巻

神大人間科学 ; 第1巻 910-81-82//1 ; 第2巻 910-81-82//2 ; 第3巻  
910-81-82//3 ; 第4巻 910-81-82//4 ; 第5巻 910-81-82//5 ; 第  
6巻 910-81-82//6 ; 第7巻 910-81-82//7 ; 第8巻 910-81-82//  
8 ; 第9巻 910-81-82//9 ; 第10巻 910-81-82//10 ; 第11巻  
910-81-82//11 ; 第12巻 910-81-82//12

同じように59年版全集を所蔵していて、同じように請求記号と資料番号が付さ  
れていて、しかも同じ大学の中でありながら、Webcat から Webcat Plus への  
データの変換に際して、一方は、13巻、14巻という情報(誤情報)が付加され、  
一方は付加されていない。同一の機関内でも、異なった方法が取られているの  
である。今後は、全14巻という情報が、どの段階で、どのように付加されたの  
かということの探求が課題であろう。

7

さて、Webcat や Webcat Plus のデータ上における、59年版の『川端康成  
全集』の最大の問題点は、本来全12冊であるにもかかわらず、全14冊と誤認さ  
れていることである。このことについては旧稿でも述べたが、論述の必要上、  
簡単に触れておく。

新潮社は1959年から全12冊の『川端康成全集』を刊行したが、1969年からは

新たに全14冊の全集を刊行し始めた。69年版の全集は、装幀や造本は59年版全集とまったく異なるが、内容的には59年版の全集を基に一部を追加したようなものであるから、所収作品やその配列はほとんど同じである<sup>(註15)</sup>。従って、もともとこの二つの全集は混同されやすい。図書館によっては、予算の関係から、59年版に69年版の全集を取り合わせて1セットにするということもあったかもしれない。

さらに、69年版の全集は、当初は14冊の予定であったのが、途中で1冊追加されることになり全15冊に変更され、さらに刊行途中の川端の死を受けて再度の変更がなされ、最終的には19冊になった<sup>(註16)</sup>。これが、Webcat Plusの「5. 川端康成全集 (7) 川端康成著 -- 新潮社, 1969, 19冊。」に該当する。69年の全集は、最終的には19冊の全集であり、これが正確なデータであるが、当初は14冊の予定であり、編集の変更に際して、刊行期間が大幅に伸びた。特に第14巻と第15巻の間には3年もの空白がある。そのため、今日でも、第14巻までしか購入していない図書館や<sup>(註17)</sup>、第14巻までをセットとして販売している古書店などもある<sup>(註18)</sup>。

こういった事情もあって、全14冊の全集が仮構される下地ができ、59年の全集がWebcat上で全14冊と誤られたのである。恐らくそれは、Webcatでは2002年9月までのデータにあった、北海道教育大学函館分館、梅花女子大学、九州芸術工科大学のいずれかのデータが、最初に情報学研究所に吸い上げられる段階で生じたのであろう。以上の三校のうち、梅花女子大と九芸工大はその後、データの修正がなされ、梅花女子大学などは、5節でも見た如く、WebcatでもWebcat Plusでも、きちんと全12冊のデータに改められている。ところが情報学研究所では、全14冊というデータが残存してしまったようである。

その結果、2003年9月現在、Webcat Plusでは、宮城教育大学(14X)、金沢星稜大学(14X)、広島女子大学(8D+6X)、広島大学(7D+7X)、大阪市立大学(1D+13X)、山梨県立女子短大(12D+2X)、実践女子大学(12D+2X)、昭和女子大学(14X)、信州大学(6D+8X)、神戸大学国際教養(10D+4X)、相愛大学(14X)、帝塚山学院大学泉ヶ丘(14X)、東北大学本館(14X)、藤女子大学本館(12D+2X)、日本大学文理学部(10D+4X)、武蔵大学(10D+4X)、北海道教育大学函館分館(14D)、明治大学和泉図書館(1D+13X)、龍谷大学大宮図書館(14X)、和歌山大学(11D+3X)、の20の機関で、59年版の『川端康成全集』が全14冊であるという、誤ったデータを表示するに至っている。1年前のWebcatの段階では、14冊と表示したのは3機関であったから、WebcatからWebcat Plusへのデータ移行の過程で、誤った情報が約7倍にふくれあがったことになる。

猶、59年版の全集の刊行時期が、Webcat では「1959-1970」となっていた問題も、前稿では指摘したが、これは訂正され、Webcat も Webcat Plus も「1959-1962」となっている。ただ個別の図書館では、古い情報のままのようで、今回確認したほぼすべての図書館が、刊行時期を「1959-1970」としているままである<sup>(註19)</sup>。情報の正確な書き換えが今後の課題であろう。

## 8

以上見てきたように、Webcat から Webcat Plus に移行する際に派生した問題がいくつかある。

特に、大部の全集などの細目表示を、Webcat の形のように復活させることは、緊急を要するであろう。一つだけ例を加えれば、恐らく戦後の日本文学全集の類の中で、歴史的価値も、今日的価値も共に最善のものであると思われる、筑摩書房の『現代日本文学全集』<sup>(註20)</sup>は、ケンブリッジ、オックスフォードをはじめとする国内外の約170前後の機関が所蔵している。北海道教育大学では附属図書館、旭川分館、岩見沢分館、釧路分館、函館分館と5箇所が所蔵しており、他にも日大、北大、東大、学習院、京大、九大等々、この全集を複数の部局で所蔵している大学は枚挙にいとまがない。いかにこの全集の評価が高いかが理解できよう。ところが、Webcat Plus の方では、このデータが全く出てこない。Webcat では、詳細表示の中の個別の巻冊に所蔵情報がぶら下がっていたからである。Webcat Plus は、現時点では巻別の所蔵情報を継承していないから、巻別情報からはじき出された月報の所蔵情報のみが表示されるという変則的な形になってしまっている。

次に、各大学・機関の書誌情報のうち、請求記号は Webcat から Webcat Plus に継承されたが、資料番号は現時点では表示されていないという問題がある。Webcat の段階で、資料番号のみの大学は、書名情報だけが残ったから、全集・叢書の場合は、現実に所蔵しているのか、ただの書誌情報なのか不明である。事実、59年版の『川端康成全集』は、1冊しか所蔵していない大学が、14冊分の巻数が表示されるに至った。これも、資料番号を復活させると回避できるのではないか。資料番号は、書物の「物理単位に対する登録番号」<sup>(註21)</sup>であるから、この番号が付されている限り、物理単位として現存する書物となるのである。

最後に、根本的な問題として、旧稿でも指摘した、誤った書誌情報の問題がある。59年版の『川端康成全集』は、全12冊の全集であるのだが、Webcat では一部に全14冊と誤った表示が出ていた。誤表示の三大学のうち二大学はその後修正されたのだが、Webcat Plus ではなぜか誤情報に基づき全14冊との書誌情

報を表示する大学が、二十三大学にも増加した。その結果、これらの大学では、Webcat と Webcat Plus のデータで所蔵冊数が違うということまで現出してしまった。誤情報の増殖がどのようにして起こったのか分析し、対応策を取る必要がある。

### 注

- (1) 拙稿「『川端康成全集』と NACSIS Webcat」(『文芸と思想』67号、2003年2月)
- (2) <http://webcatplus.nii.ac.jp/abpit/top.html>
- (3) たとえば、高橋治『絢爛たる影絵—小津安二郎—』を調べると、1982年の文藝春秋版では、タイトル、責任表示、出版事項、形態事項、著者標目、分類、件名などの書誌情報が出てくるだけだが、2003年の講談社版では、内容として、次のような文章がみられる。

小津安二郎の代表作、『東京物語』で助監督をつとめた作家・高橋治が伝説の巨匠の生涯を鮮やかに蘇らせたノンフィクション・ノベル。

カメラマン厚田雄春ほか、笠智衆や岸恵子、篠田正浩、大島渚など、生前の小津を知るゆかりの人々を訪ね歩き、多くの文献に基づきながらも、あくまでも高橋治自身の眼で見た小津、セットの空気を一緒に吸った小津を語る。

出色の小津論として評価された幻の名作が、小津安二郎生誕一〇〇年に際して復活!

小津のシンガポール時代を書いた短編も併録。

これは、帯の文章を再掲したものだが、同書のまさに「空気」を良く伝えていると言えよう。

- (4) 同じデータベースに英国ブックデータなどの情報を加え、2003年9月現在で、約20万件の目次や内容情報の文字列検索が可能な、東京大学の「ブックコンテンツ・データベース」は、利便性がある。

猶「『BOOK』データベース」「ブックコンテンツ」については、「書誌情報の充実と図書館への道」(『九州地区大学図書館協議会誌』46号)でも言及した。

- (5) 「角川版昭和文学全集」というのは、国会図書館などでも使用される称であるが、やや誤解されやすいかもしれない。1950年代初頭に同じ角川書店から出版され「当今随一の大当たりを誇った」(岡野他家夫『日本出版文化史』第六章)、A5判で全60冊の『昭和文学全集』とは別のものである。こちらは、1960年代前半に刊行された、変型四六判全40冊で、サファイア・セット、ルビー・セットの愛称で親しまれたものである。拙稿「角川書店の『昭和文学全集』の変化」参照。

猶、注(1)拙稿の段階では、「宮沢賢治集」のページ数のデータが、現物とは異なる大学は3大学だったが、2003年9月現在、新たに北海道武蔵短大が加わっている。小さな例ではあるが、これもまた誤情報が増殖した例である。

- (6) 拙稿「新潮社の日本文学全集の動静」(『香椎潟』49号、2003年7月)  
 (7) 『新潮社八十年図書総目録』(1976年)の、1969年4月15日の項には、はっきりと「ノーベル文学賞受賞記念出版」と記されている。

『川端康成全集』全十九巻の刊行を始める(→49・3・30)。ノーベル文学賞受賞記念出版。全十五巻の予定で刊行を開始するが、十四冊を刊行して著者が死去したので、第十五巻の編集を改め、四冊を追加して、全十九巻とする。

ただし「全十五巻の予定で刊行を開始」というのはやや不正確で、十四巻→十五巻→十九巻という経過を辿った。注(16)参照。

また、当時の内容見本の表紙には、「ノーベル文学賞受賞記念出版 川端康成全集 全十四巻」と記されている。

- (8) 大まかにいって、全国の大学の図書館の蔵書のうち、Webcatで横断検索できるものは、現時点ではまだ半分程度ではないか。各大学のOPACで検索できるがWebcatには情報が上がっていないものもあるし、何よりも過去の文献まで遡及入力できていない大学がかなりある。たとえば、図書館改革にいち早く着手し、「和漢古典籍に関する知識と技術の継承プロジェクトグループ」の活動が平成15年度国立大学図書館協議会賞を受賞した、名古屋大学附属図書館でも、OPACで検索可能な図書は「原則として、1987年4月以降に受入されたもの」(<http://opac.nul.nagoya-u.ac.jp/help/japanese/opacdata.html>)である。遡及入力が終わるのは6年後の予定である(第19回大学図書館研究集会、2003年9月19日、於早稲田大学国際会議場、「変革の時代に於ける図書館経営戦略—存在感ある図書館を目指して—」配付資料、16ページ)。先進的な大学でも、労力・予算面など多くの制約があるようだ。現時点でもさまざまな形で有効活用が可能なWebcatの横断検索であるが、これら各大学のデータが吸収されると、その恩恵は計り知れないものがある。
- (9) Webcatでは金沢星稜大学の大学名のみで、具体的な所蔵は示されない。金沢星稜大学のOPACで検索したところ、全12冊(請求番号918.68/KA91/1~12)が記念館3階の第一図書館に所蔵されていることが確認できたので、「12d」と表示した。
- (10) 香川大学もWebcatでは校名のみが表示なので直接検索したところ、全12冊(081.8/8/1~12)が中央館に所蔵されていることが確認できたので「12d」と表示した。
- (11) 四国学院大学のWebcatのデータは、下記の如くであるが、これは機械的な表示ミスで、第9巻から第12巻までがつながってしまったようだ。Webcat Plusのデータを参考にして「12d」と表示した。

四国院；第1巻 918.6 || KA91 0103563；第2巻 918.6 || KA91 0103564；第3巻 918.6 || KA91 0103565；第4巻 918.6 || KA91 0103566；第5巻 918.6 || KA 91 0103567；第6巻 918.6 || KA91 0103568；第7巻 918.6 || KA91 0103569；第8巻 918.6 || KA91 0103570；第9巻 918.6 || KA91 0103571 918.6 || KA 91 0103572；第12巻 918.6 || KA91 0103573

- (12) 北海道教育大学函館分館のデータは、資料番号の隔たりから推測して、59年版の全12冊の全集に、69年版の全集の第13巻、第14巻が一つの全集として数えられたことによ

るのではないか。注(1)拙稿参照。

- (13) 梅花女子大学のデータは、前稿でも触れた如く、当初は14冊と記されていた。そのうち Webcat のデータは修正されている。Webcat Plus のデータも2003年3月の段階では、以下のように14冊(14X型)となっていたが現在では12冊に修正されている。適宜データのチェックが行われているのであろう。図書館のデータ管理のあるべき方向性を示すものとして注目されるべきところである。

梅花女子大学の、2003年3月10日時点での、Webcat Plus のデータは以下のようであった。

梅花女 第1巻；第2巻；第3巻；第4巻；第5巻；第6巻；第7巻；第8巻；第9巻；第10巻；第11巻；第12巻；第13巻；第14巻

- (14) 大阪市立大学と、明治大学和泉分館の Webcat のデータを出しておく。

阪市大 函；第10巻 918.6//K1//1-10 A-43640

明大 和；第6巻 918 || 115 |||| W 300866；月報 918 || 115 |||| W 355316

- (15) 注(1)拙稿。

- (16) 『川端康成全集』第13巻(1970年4月刊行)に挿入された「読者の皆様に」という一枚刷りのチラシには次のように記されている。

川端康成全集は、全14巻として発表いたしました。第一回配本以来ほぼ毎月刊行を続けて参りましたが、収録分量の関係上、一巻を増巻し、全15巻とさせていただきますことになりました。残る二巻の内容はだいたい左記のやうになります。

第十四巻 随筆・後記集成(以下略)

第十五巻 文藝時評・美しい日本の私(以下略)

なほ、原稿整理、著者校閲のため、第十四巻は九月下旬刊行(第十五巻の刊行期日は第十四巻に明記)になります。(下略)

第14巻が、「獨影自命・續落花流水」として刊行されたのは、70年10月、その月報の末尾には、次のように記されている。

残る最終巻(第十五巻「文藝時評・美しい日本の私」)は、來春四月刊行の予定です。

ところが、71年3月の川端の自死のために、この予定は大幅に変更を余儀なくされ、第15巻の「たんぽぽ・竹の声桃の花」が刊行されたのは73年9月であった。「美しい日本の私」は第15巻に含まれたが、「文藝時評」を中心とした批評集成が「文學時評」として16巻～19巻の4巻に再構成されることとなり、ここに全19巻としての、この全集の最終変更が行われたのである。

また、19巻版として再スタートするにあたって作成された内容見本の9ページには、「増巻の経緯その他一配本再開に際し、編集部より一」として、この間の経緯が詳しく述べられている。

- (17) 因みに、Webcat から、69年版の全集の所蔵図書館数を調べると、第14巻までを所蔵している大学のうち、約20の大学が第15巻以降を所蔵していないことが分かる。館数のみ示せば、第13巻を所蔵している図書館数は122、第14巻は121であるのに対し、第

15巻は101、第16巻～19巻は103である。このほとんどは、刊行が遅延している間に、定期購入のリストから漏れてしまったのではないかと思われる。

- (18) 注(1)拙稿。
- (19) 東京大学総合図書館をはじめほとんどの大学では、刊行時期は「1959-1970」のままである。正しく「1959-1962」となっているのは、梅花女子大学図書館などごく一部に過ぎない。
- (20) 拙稿「筑摩書房の日本文学全集の変遷」(『香椎渦』48号、2002年12月)
- (21) 『目録情報の基準』第4版、第2部目録情報の作成(文部省学術情報センター、1999年12月)

(2003年9月30日稿)

(付記) 校正の段階で次の情報に接した。国立情報学研究所開発・事業部次長名で、目録システム参加機関あてに送られた「平成16年度遡及入力事業の実施について(照会)」という文書(国情研コ第163号、16年1月15日付)に依れば「蔵書数に対するNACSIS-CATへのデータ入力率(遡及率)は、国立大学に限っても50%程度にとどまっているとのことである。注(8)の見通しの裏付け資料としてあげておく。